

現代山村における若年他出者の出身村とのつながりとUターンの条件 —長野県天龍村の中学校卒業生調査から—

Young Out-migrants' Connections to their Village of Origin and their Conditions for Returning Home to Contemporary Japanese Mountainous Villages: Findings from a Graduate Survey of Tenryu Junior High School, Nagano Prefecture

相川 陽 一* 丸山 真 央** 福島 万 紀***

Yoichi AIKAWA Masao MARUYAMA Maki FUKUSHIMA

1. 問題の所在

高度経済成長期に顕在化した若年層の農山村部から都市への移住は、日本社会の産業構造の転換および三大都市圏への人口集中と農山村の過疎化をもたらした。2010年代には、国勢調査で総人口の減少が確認され、公共セクターの縮小や人口再配置をめぐる論争の中で、常住人口のみならず、都市部に住む他出子の出身村とのつながりに着目した研究が蓄積されつつある。

本論文は、現代山村を対象とした他出子研究の動向をふまえ、従来手薄であった他出子本人への調査から若年他出子のUターン条件を解明することを目的とする。本論文では山村を「地域の多くが山林で覆われており、山地農業と林業によって生活の基盤が支えられている人びとが、その生産と生活を通して相互に取り結んでいる社会」、現代山村を「戦後日本資本主義の展開過程で商品経済が山村生活の深部にまで浸透していった高度成長期以降の山村」と定義する(大野 2005: 7)。

農村社会学と地域社会学における近年の他出子研究には、農山村出身者のネットワークに着目した研究(佐藤・内田 2003, 2004; 野邊 2006など)のほか、農山村出身者の一定数が出身村から1時間圏内に居住し定期帰郷する事例を踏まえて、農山村と地方都市間の生活圏の重なり合いを捉える「修正拡大集落モデル」を提示した研究(徳野・柏尾 2014; 徳野 2015)

がある。地域労働市場の状態などを重視して他出子と出身村との関係を考える研究もある(上野 2016)。

既存の他出子研究の多くは、他出子の親を対象とした調査に基づいており、他出子本人を対象にした調査は少ない(Tolga 2009; 船戸 2019)。背景には、広域に居住する他出子に調査を行うことの難しさがあると考えられるが、他出子のUターン意向を含めた実態を捉えるには、他出子本人への調査を避けて通ることはできない。

そこで筆者らは、高齢化と人口減少が著しい水準で進行する現代山村のひとつである長野県下伊那郡天龍村の中学校卒業生を対象に、郵送法の質問紙調査と面接法のインタビュー調査を実施した。調査では、Uターン研究等で一定の研究蓄積がある中高年層ではなく、10歳代後半～50歳代はじめの比較的若い世代を対象にした。本論文ではこれらの調査の結果を報告し、かれらの出身村とのつながりの状態やUターン等の意向を明らかにする。

また本論文では、調査結果の報告にとどまらず、他出子研究の既往知見のうち、前述の「修正拡大集落モデル」、すなわち他出子の多くが出身村から1時間圏内に居住し、定期的に帰省して親の生活をサポートしているとする仮説(徳野・柏尾 2014)を検証する。あわせて、他出子の一定数が家や村への思いからUターンの意向を持っているとする仮説(船戸 2019)の妥当性も検証したい。

以下では、まず、筆者らが調査を実施した長野県天龍村の地域概況を示す。次に、調査の具体的な方法を述べる。そのうえで、質問紙調査の結果を整理し、若年他出子たちの出身村とのつながりや故郷への思いを定量的に示す。そして、インタビュー調査結果から若年他出子たちのつながりや思いの定性的な分析を行い、先の定量的な分析結果にエピソードデータを補強する。結論部では、調査結果の分析から得た知見を整理し、他出家族研究やUIJターン研究における今後の課題を含めて若干の議論を行いたい。

2. 調査対象地の概況

長野県下伊那郡天龍村は、県最南端の愛知・静岡県境の接するところに位置する。地質的に中央構造線の西側にあたり、村の大半が急峻な山間地である。1956年9月に旧平岡村と旧神原村が合併して誕生した村であり、以後合併をしていない。

最も近い都市である飯田市は、天龍村の北に位置し、村中心部から同市中心部まで約40キロ、車でもJR飯田線でも1時間程度である。また下伊那郡南部の中心は、天龍村北隣の阿南町であるが、村中心部から同町中心部までは約10キロ、車で20分程度である。

国勢調査によると、2015年の天龍村の人口は1,365人、651世帯で、高齢化率は59.0%にのぼる。これは全国の市町村の中で第2位の高さである。戦時中から戦後初期にかけて旧平岡村内（現天龍村の中心部）に平岡ダムが建設され、それに伴い一時的に人口が急増し、1950年には8千人を超えた。しかしダム完工後は、主産業の林業が衰退したこともあって、人口と世帯数はともに減少しつづけてきた。

今回調査を実施した天龍村立天龍中学校は、天龍村の唯一の中学校で、村中心部の平岡地区にある。1961年に平岡中学校と神原中学校が合併して天龍中学校となり、現在に至っている。なお、現在の生徒数は14人（1年生2人、2年生5人、3年生7人）（2017年度現在）である。

3. 調査方法

3.1 卒業生アンケート

筆者らは天龍中学校の卒業生を対象に2種の調査を実施した。ひとつは20～50歳の卒業生を対象にした郵送法による自記式の構造化質問紙調査である（以下「卒業生アンケート」と呼称）。これは次の方法で実施した。まず、天龍中学校の卒業生のうち2017年

度の時点で20～50歳の卒業生（1982年～2012年度卒業、1967～1997年度生まれ）の全712人のうち、2017年度の時点で天龍村外に在住しており、現住所が判明した人に対して天龍村役場から「天龍村への協力の意向調査票」を送付した。これに対し「協力意向あり」と回答した卒業生は68人であった。この68人を対象に、2017年10月に郵便で調査協力の依頼状、調査票、返信用封筒を発送した。結果は、発送数68票のうち、有効回収数40票（有効回収率59%）であった。

一般的に、郵送法の自記式調査は、調査の主題や目的に否定的な対象者が回答しないという傾向は避けられないが、筆者らの卒業生アンケートは前述のプロセスから、こうしたバイアスが大きなものとなっていることは否定できない。したがって卒業生アンケートの回答者を天龍中学校卒業生の正確な標本とみなすわけにはいかない。卒業生アンケートの結果を解釈するうえで、かかるバイアスを峻別する必要に留意したい。

3.2 卒業生インタビュー

卒業生アンケートの発送に際して、個別の訪問面接式のインタビュー調査に協力してもらえるかどうかを尋ねる用紙も同封した。その結果、卒業生アンケートの回答者40人のうち10人が協力可能と回答した。この10人に対し、2017年12月から訪問面接式の自由口述法による調査（「卒業生インタビュー」と呼ぶ）を実施している（現在も継続中）。調査では訪問面接方式を基本とするが、子育て世代や公私多忙な場合は電話による面接のものも含まれる。調査員は相川が務め、所要時間は回答者1人あたり約1時間である。また、調査協力者からの紹介により、天龍村在住の親世代へのインタビュー調査も実施した。調査内容はいずれも電磁的な記録はせずノートに筆記し、詳細なインタビュー記録を作成した。以下ではこのインタビュー記録から引用する。

4. 卒業生アンケートの分析

4.1 回答者の構成

ここからは卒業生アンケートの結果を整理していくが、まず回答者の構成をみよう。表1は性、年齢、出生地、最終卒業学校、現職別の単純集計結果である。回答者は女性の占める割合が大きい。調査対象者は20～50歳であり、21歳～30歳が13%、31歳～40歳が28%、41歳～50歳が60%を占める。40歳以上が過半

数である。回答者の出生地は村内が大半である。最終卒業学校別では、大学・大学院卒が4割以上を占め、高学歴層の占める割合が大きい。現職別では、家事・無職が15%であり、有業者は常雇の被用者の占める割合が大きい。職種別では専門職が25%、管理職が10%を占める。従業先の規模別では、従業員1千人以上の大企業が15%、また官公庁・公共企業体が15%を占める。総じて回答者は、職業面で比較的高階層が多い。以下の分析では、こうした回答者構成の偏りに留意する必要がある。

また、回答者の世帯状況をまとめたものが表2である。世帯類型別では、夫婦(または一方)と未婚子の核家族世帯が半数近くを占める。世帯年収別では、600万円以上が約半数とかなり高めである。現住地別では、飯田市と下伊那郡内で全体の4割近くを占める。愛知県などの東海地方、東京都などの関東地方の在住者も一定数いる。住宅状況では持家層が55%を占

表1 回答者の主な社会的属性

		度数	(%)
性別	男性	15	(38%)
	女性	25	(63%)
満年齢	21～30歳	5	(13%)
	31～40歳	11	(28%)
	41～50歳	24	(60%)
出生地	天龍村内	38	(95%)
	天龍村外	2	(5%)
最終卒業学校	中学校	2	(5%)
	高校	13	(33%)
	短大・高専・専門学校	8	(20%)
	大学・大学院	17	(43%)
現職	家事・無職	6	(15%)
	会社経営・役員	2	(5%)
	常雇の被用者	24	(60%)
	非常雇の被用者	6	(15%)
	自営・家族従業・自由業	1	(3%)
	不明・無回答	1	(3%)
職種	専門職	10	(25%)
	管理職	4	(10%)
	事務・販売・サービス職	17	(43%)
	生産工程・労務、保安職	2	(5%)
	非該当(家事・無職、不明)	7	(18%)
従業先規模	民間企業(1千人以上)	6	(15%)
	民間企業(100～999人)	6	(15%)
	民間企業(30～99人)	5	(13%)
	民間企業(29人以下)	5	(13%)
	自営業	2	(5%)
	官公庁・公共企業体	6	(15%)
	その他	1	(3%)
	不明・無回答	2	(5%)
	非該当(家事・無職、不明)	7	(18%)
合計		40	(100%)

める。天龍村から車で1時間ほどの距離に回答者の4割が居住しており、前述した「修正拡大集落モデル」と概ね合致する結果といえそうである。

さらに、回答者が天龍村から最初に転出した状況を尋ねたところ、18歳時が最も多かった。転出理由は進学が半数強、就職が3割弱である。転出先は飯田市が20%、松本市や諏訪周辺などの飯田市以外の長野県

表2 回答者の世帯状況

		度数	(%)
世帯類型	単独	6	(15%)
	夫婦のみ	7	(18%)
	夫婦(または一方)と未婚子	19	(48%)
	親同居	6	(15%)
	不明・無回答	2	(5%)
世帯年収	300万円未満	5	(13%)
	300～599万円	10	(25%)
	600～799万円	12	(30%)
	800～999万円	4	(10%)
	1000～1499万円	3	(8%)
	1500万円以上	0	(0%)
	不明・無回答	6	(15%)
現住地	長野県飯田市	10	(25%)
	下伊那郡内	5	(13%)
	その他の長野県内	8	(20%)
	東海地方	5	(13%)
	関東地方	8	(20%)
	関西地方	1	(3%)
	不明・無回答	3	(8%)
住宅	自家所有	22	(55%)
	借家・賃貸	15	(38%)
	不明・無回答	3	(8%)
合計		40	(100%)

表3 天龍村から転出した時期、理由、転出先

		度数	(%)
転出時の年齢	17歳以下	5	(13%)
	18歳	20	(50%)
	19歳	6	(15%)
	20歳以上	8	(20%)
	不明・無回答	1	(3%)
転出の理由	進学	21	(53%)
	就職	11	(28%)
	結婚	6	(15%)
	自分の転勤	1	(3%)
	その他	1	(3%)
転出先	長野県飯田市	8	(20%)
	その他の長野県内	6	(15%)
	東海地方	10	(25%)
	関東地方	13	(33%)
	関西地方	2	(5%)
	不明・無回答	1	(3%)
合計		40	(100%)

内が15%、名古屋市などの東海地方が25%、東京都などの関東地方が33%である(表3)。長野県は県土が広大であり、松本市などの主要都市には大学や事業所が立地しており、県内進学や県内就職も一定数ある。また、天龍村を含む飯田下伊那地域は、名古屋市を中心とした東海地方との結びつきが強い。こうした事情を反映して、他出子の最初の転出先も首都圏に次いで東海圏が上位を占めている。

4.2 帰省と「おすそわけ」

(1) 帰省

天龍村内在住の家族・親戚の有無を尋ねたところ、回答者40名中、「父母」は全員が在住という結果である。調査対象者が若いことによる結果といえよう。また、村内に「祖父母」がいると答えたのは10名(25%)、「おじ・おば」は12名(30%)、「兄弟姉妹」は11名(28%)、「いとこ」は4名(10%)である。

天龍村への帰省頻度を尋ねたところ、「月1回以上」6名(15%)、「半年に1回以上」24名(60%)、「年1回以上」6名(15%)、「年1回未満」4名(10%)、「全く帰らない」ゼロであった。少なくとも半年に1回以上帰省する人は75%を占め、そう頻繁ではないものの、盆・正月等の節目に帰省している姿がうかがえる。

帰省の理由・目的を10項目から複数回答により選んでもらった結果が表4である。最も多いのは「家族や親戚の様子見に」で、次いで「盆・正月」であり、いずれも大半の回答者が選んだ。「くつろぐため」、「墓参」はそれぞれ4割である。総じて、盆・正月に帰省し、村に住む家族や親戚と親しく交わったり、生家や郷里でゆっくりしたり、墓参をしたりといった帰省風景が浮かぶ。また、年中行事や先祖供養とそれらを支える「家」が今も機能していることがうかがえる。他方、「農作業や田畑の管理」、「家事の手伝い」、「家や庭の手入れ

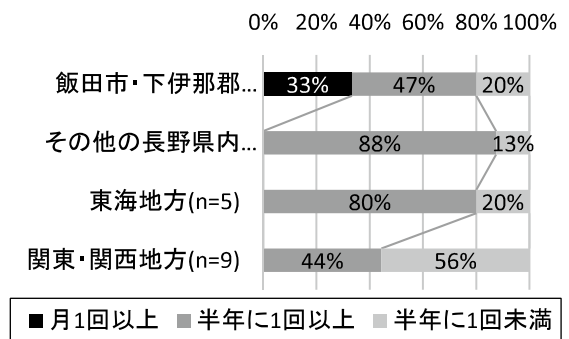
表4 「天龍村に帰るのはどのような理由からですか」

	度数	(%)
家族や親戚の様子見に	37	(93%)
盆・正月	34	(85%)
くつろぐため	17	(43%)
墓参	16	(40%)
冠婚葬祭	11	(28%)
農作業や田畑の管理	9	(23%)
村や地区の行事や祭り	9	(23%)
家事(食事、買い物、掃除など)の手伝い	8	(20%)
家や庭の手入れ・修理(空き家を含む)	6	(15%)
山仕事や山林の管理	3	(8%)
介護や看病	2	(5%)

や修理」、「山仕事や山林の管理」といった明確な作業目的の帰省は少なかった。これは回答者の親世代がまだ健在であることの裏返しとみることもできよう。「介護や看病」を挙げた回答者は2人にとどまった。

筆者らは以前、卒業生アンケートとは別に、天龍村内の全世帯を対象に質問紙調査を実施したことがある。その中で他出家族員の帰省状況を尋ね、帰省の背景要因を分析したところ、他出家族員の帰省状況には、他出家族員の居住地の影響が大きかった(丸山ほか 2017)。これは近年の他出家族研究の知見と共通するものであるが、他出子本人を対象にした卒業生アンケートでもそうした関連性がみられるかを確認してみよう。卒業生アンケートの回答者の現住地と帰省頻度のクロス集計結果が図1である。たしかにここでも、飯田市・下伊那郡在住者は、月1回以上帰省するという回答が33%を占めたのに対し、飯田・下伊那以外の在住者には月1回以上帰省するとの回答はなかった。頻繁な帰省は近距離に居住する他出子に限られていることが明らかである。

図1 現住地×帰省頻度のクロス集計の結果



(2) 農林産物の「おすそわけ」

前述の天龍村内全世帯対象の質問紙調査では、他出家族員に対して農産物や林産物を送ったり、帰省した際にあげたりする「おすそわけ」が頻繁におこなわれていることがうかがえた(丸山ほか 2017)。そのことが、他出子本人を対象にした今回の卒業生アンケートでもみられるかを確認しよう。

「天龍村在住のご家族・ご親戚から、農産物・林産物(加工品を含む)をおすそわけしてもら(送ってもらう)ことはありますか」との質問に対して、「ある」と答えたのは、「米」20名(50%)、「野菜・果物」34名(85%)、「山菜・きのこ・タケノコ」28名(70%)、「その他の農林産物」10名(25%)、「加工品(煮物、漬物、茶等)」

31名(78%)である。全くないという回答者はいなかった。「米」をもらうことがあるという回答者は半数であるが、天龍村が農地狭隘で水田の少ない地域であることを考えると十分に多い結果である。「野菜・果物」、「山菜・きのこ・タケノコ」がいずれも7～8割であることも、他出子たちが天龍村の田畑・山の産物の恩恵を受けていることを裏づけている。

「おすそわけ」をもらう頻度は、帰省頻度の回答結果と似た傾向を示す。「農産物・林産物(加工品を含む)をもらうのは、おおよそどのくらいの頻度ですか」という質問に対して、「月1回以上」は6名(15%)、「半年に1回以上」25名(63%)、「年1回以上」(15%)、「年1回未満」2名(5%)、不明・無回答1名(3%)という結果である。これらは他出子の帰省頻度とおおむね合致しており、他出子宛に宅配便等で送ってもらうというよりは、帰省した際にもらって帰ることが多いことを意味していると考えることができる。

こうした「おすそわけ」の具体的な様子を、卒業生インタビューの結果からみてみよう。20歳代男性のB氏は、「自分は、味噌と米はこれまでに1回も店で買ったことはない」と言う。そして「両親が飯田市内に買い物に来ることがあるので、そのときにおすそわけを持ってきてくれて、不定期にもらっている。ときには「玄関前に置いておいたよ」と電話が来ることもある。……もらいに行ったり、来た時にもらったり。あげるためだけに親たちが行き来することはない。[天龍村の実家に農林産物を]もらいに戻るときには飯田でお遣いをして、戻ったらついでに1泊してくる」とのことであった([]は著者による)。

4.3 インターネット等を通じたつながり

様々なコミュニケーション・ツールが普及した今日、他出子の同級生等とのつながりでもそうしたツールが活用されているのであろうか。「天龍村に住んでいたときの友人や知人の中で、今でも連絡をとっている人がいますか」と尋ねたところ、「年1回以上連絡をとる人がいる」が29名(73%)で回答者の4分の3近くを占め、「数年に1回連絡をとる人がいる」が7名(18%)、「全くいない」が4名(10%)であった。今でも連絡をとっている友人・知人がいるという37人のうち、連絡手段で最も多いのは「LINE」25名(69%)で、次いで「電話」13名(44%)、「電子メール(携帯メールも含む)」13名(36%)、「Facebook」5名(14%)、「Twitter」1名(3%)である。帰省時に会う、あるいは現住地近くで

会うといった従来の同郷的つながりが、ウェブやSNSによって代替されていることが浮かびあがる結果である。

天龍村では村役場をはじめいくつかの機関や団体が、ウェブサイトやSNSで情報発信をしている。卒業生アンケートで各種メディアの閲覧・アクセス状況を尋ねたところ、閲覧・アクセスすることがあるという回答者は、「村役場のウェブサイト」19名(48%)、「村役場のTwitter」5名(13%)、「村役場のFacebook」7名(19%)、「天龍村地域おこし協力隊のTwitter」5名(13%)、「協力隊のFacebook」8名(20%)であった。

また「あなたは、次のような情報発信が天龍村からあれば、見たいですか」と、村の広報紙、メールマガジン、LINEについて尋ねたところ、「見たい」との回答は、広報紙22名(55%)、メールマガジン12名(30%)、LINE14名(35%)であった。自由記述には「村内の状況や学校の様子をFacebook等で発信してほしい」「観光スポット(県外)などの詳しく載っているものがあれば良い」などの回答があった(原文ママ)。

4.4 村への思い

他出子の出身村との心理的なつながりとして天龍村への愛着を尋ねた。「あなたは天龍村に愛着を感じますか」という質問に対して、「感じる」24名(60%)、「やや感じる」15名(38%)、「あまり感じない」1名(3%)、「感じない」0名との結果であった。そもそも天龍村に愛着を有していない人は調査に回答しないとも考えることはできるが、それでも「感じる」と「やや感じる」をあわせて98%という結果は、他出子たちの出身村への愛着の強さを示すと考えられる。

また「天龍村の魅力とは、どのようなものでしょうか」との質問(自由記述)に対して、次のような回答があった。

- ・「緑が多く自然豊かなところ。地域の方とのつながりが深く、あたたかい。」
- ・「人々があたたかいところ、出会うとあいさつはもちろん世間話まですぐにはじまる。農産物がおいしいところ。ていぎなすやゆべしなど。」
- ・「四季折々の自然が美しく、食べ物も美味しい。駅もあり交通の便がいいと思う。」
- ・「近所付き合いが、かなり近い。中学・高校の頃はうっとうしく感じることもあったが天龍村を離れてみると、あれはあれでよかったと思う。」

- ・「住んでいる時は気づかなかったけど、離れてみると人の温かさや自然の豊かさは、素敵だなと思います。「どこの出身!？」と聞かれることが多いのですが、天龍村というと「だから優しい」とかいわれます。」

こうした魅力の一方で、天龍村で少子高齢化、人口減少が進行しているのは否定できない事実である。こうした現状に対し、他出者はどう考えているのか。「今のふだんの暮らしの中で、次のことを不安に感じることがありますか」として4項目について不安の有無を尋ねた。結果は、「村在住の親・祖父母の世話・介護」に不安ありと答えた回答者は35名(88%)にのぼった。「村にある家屋・農林地」における不安ありとの回答は18名(45%)、「天龍村の将来」に不安あり17名(43%)、「出身地区の将来」に不安あり9名(23%)であった。

また「天龍村は将来どうなっていくのが望ましいとしますか。村の将来の理想像や、そのために必要な政策や取り組みについて、お考えをお聞かせください」という自由記述式の質問に対しては、次のような回答があった。

- ・「自然の豊かな地で子育てをしたい。あるいはできる環境の整備を進めることで将来を担う人材を育成する。」
- ・「交通の便を良くして、外から天龍村に住む人を増やす。天龍村の魅力を発信する。」
- ・「地域おこし協力隊やUターンの方たちもがんばってくれているので、これ以上、高齢化せず、今の老年寄りが楽しく過ごせる村であってほしい。」
- ・「高齢者をいたわれる社会であること(車に乗れなくても通院、買物に困らない)。どこに住んでいても同じ様にサービスを受けられること。」
- ・「今後、日本全体がさらに少子高齢化が進んでいく中で、天龍村が直面している課題は日本が近い将来直面するものとする。マイナスに捉えず、課題先進地域としてユニークな施策にチャレンジして行ってほしい。」

4.5 Uターン・二地域居住・Jターンの予定と希望

(1) 具体的な予定・希望の有無

本論文の中心的な課題である他出子たちのUターン等について、卒業生アンケートの結果をみていこう。

まず、「あなたは天龍村に帰郷して住む具体的な予定はありますか」という質問に対する結果をみよう。「天龍村に移住(帰郷)する(Uターン)予定がある」

1名(3%)、「現在の住居または別のところと天龍村との両方で生活する(二地域居住)予定がある」3名(8%)、「天龍村ではないが今より天龍村に近いところに住む(Jターン)予定がある」2名(5%)、「いずれの予定もない」34名(85%)という結果であった。調査対象者が20～50歳という比較的若い現役世代であることの影響を強く受けた結果といえよう。

Uターン、二地域居住、Jターンのいずれかの具体的な予定があると答えた6名に対し、「いつ、どんな予定ですか」と尋ねたところ、「考えてはいるが未定。」「実家の父・母の体調仕だい[原文ママ]。具体的には決めていない。」「職場が異動した際。」「親に介護が必要となった場合帰郷します。」「定年になったら考える。」「来年職場を変えるため。」という自由記述があった。

具体的な予定と別に「あなたは天龍村に帰郷して住む希望はありますか」という質問も設けた。「天龍村に移住(帰郷)する(Uターン)希望がある」0名、「現在の住居または別のところと天龍村との両方で生活する(二地域居住)希望がある」8名(24%)、「天龍村ではないが今より天龍村に近いところに住む(Jターン)希望がある」2名(6%)、「いずれの希望もない」23名(68%)、不明・無回答1名という結果であった。

二地域居住、Jターンのいずれかの希望があると答えた10名に対し、「いつ、どのような希望ですか」と尋ねたところ、「子育ての時期に。」「子供が独立して自分の時間をもっと確保できるようになったら。」「退職してからゆっくりすごしたい。」「退職後に山林や田畑の管理・存続の為。」「退職後は長野県ですごしたい。」など、ライフステージが変わったら移住したいという回答があった。他方で、「親が介ゴ[原文ママ]が必要になった時。」「両親共に元気であるのが、病気になったりした時どうするかということを考えると…と思う。」など、親の加齢を想定した回答もあった。そのほか、「(現実にはならないと思うが)天龍村でやりたいことができた時。」「のんびりと過ごしたい。」「いつ」と言うのは、未定。」という、漠然とした願望もあった。さらには、「結婚しているので、住むということは出来ないとはいいますが、天龍村が無くなってほしくないで…。」という回答もあった。

(2) 帰郷を阻む構造要因

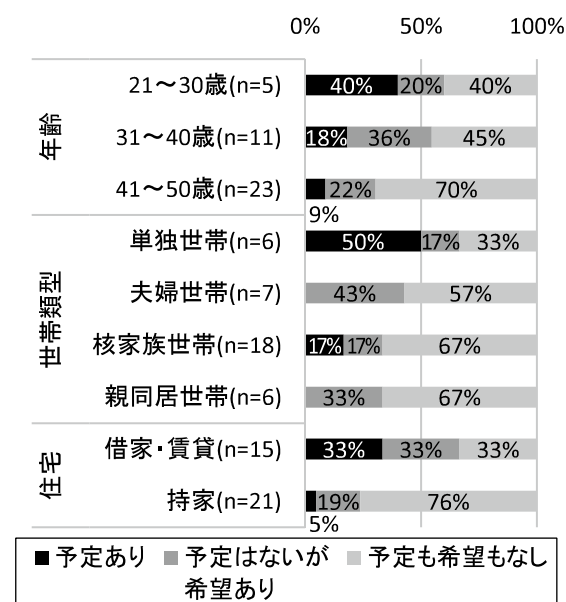
Uターン、二地域居住、Jターンのいずれの希望も持っていないと答えた23名に対し、その理由を、「その他」を含む9つの選択肢から選んでもらう形式で尋ね

た(複数回答形式)。あてはまるとの回答が多い順に、「仕事」17名(74%)、「子どもの教育」13名(57%)、「買い物の利便性」11名(48%)、「交通・移動の利便性」8名(35%)、「病院・福祉」6名(26%)、「趣味・余暇・娯楽」2名(9%)という結果であった。「村の人間関係」、「村や地区の役務負担」を理由に挙げた回答者はいなかった。「その他」は6名(26%)で、自由記述欄に「結婚相手の実家があるため。」「結婚して養子に入った。」という回答があった。

以上からうかがえるのは、Uターン・二地域居住・Jターンを阻む要因に、就業機会や職種の制限、子の教育環境といった社会構造上の制約要因が大きそうだということである。農山村の生活習慣や社会的共同生活に伴う煩わしさはUターン困難要因に挙がっていないし、趣味・余暇・娯楽の少なさも主たる制約要因とはなっていないようである。

これらを裏づけるべく、Uターン、二地域居住、Jターンのいずれかの「予定あり」、「予定はないが希望あり」、「予定も希望もない」の3つに分けて、年齢、世帯類型、住宅状況別に回答をみている(図2)。年齢別にみると、回答者の年齢が若いほど「予定あり」の割合が大きく、年齢が上がるにつれて「予定あり」の割合が小さくなり「予定も希望もなし」の割合が大きくなる。若いほど配偶者・子・両親の事情などを配慮する必要がなく「身軽」だが、年齢が上がるにつれて、結婚して配偶

図2 年齢、世帯類型、住宅状況×帰郷予定・希望

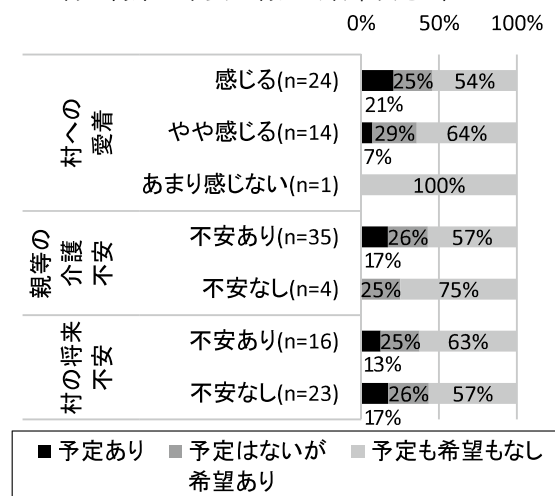


者ができ、子をもうけて教育を考える必要が出てきて、Uターンの壁は高くなる。これらは個人の事情であると同時に、高等教育機関や労働市場の地域的偏在という社会構造に規定された事情との面ももつ。

この推測は世帯類型・住宅別の結果で補強される。Uターンの「予定も希望もなし」の割合は、単独世帯<夫婦世帯<核家族世帯・親同居世帯の順である。住宅を購入すれば、転居は往々にして売却を伴わざるを得ないから、Uターンはいっそう困難となる。

こうした社会構造上の制約は、家や村への愛着や思いと関連していないわけではないが、総体として独立したものである。出身村への愛着、老親介護への不安の有無、出身村の将来への不安の有無の3つの意識別にも集計してみた。図3によれば、村への愛着が強いほど「予定あり」の割合は大きくなる傾向がうかがえる。しかし老親介護への不安、村の将来への不安は、帰郷の予定・希望との間に関連性がほぼない。少なからぬ他出者は、村に残している老親や人口減少が進む村の将来に不安を抱いているものの、だからといってUターンを選択する(できる)わけではないのである。

図3 天龍村への愛着、老親介護等の不安の有無、村の将来の不安の有無×帰郷予定・希望



5. 卒業生インタビューの分析

5.1 30代女性A氏の場合

卒業生アンケートの結果をふまえ、インタビュー調査の結果から、他出子の天龍村への愛着やUターンに関する意向を確認していく。主として面接方式で調査を実施することが可能であった2名についてみていく。

1人目は、長野県内に住む30歳代の女性である。以下、A氏と呼称する。A氏は飯伊地域の高等学校を卒業後に長野県内の大学を卒業し、公務員(正規職員)として働いている既婚者である。以下は、2017年12月に作成した調査ノートからの引用である。

A氏は頻繁に天龍村に帰省しており、「盆暮れ正月以外にも、連休があったら、自分1人で(実家に)戻る」。卒業生アンケートの回答者の中でも実家への帰省回数が多いほうであり、実家をくつろぎや休息の場所として捉え、職場等で困難なことがあった際に実家で羽を休め英気を養っているようである。

同級生と頻繁に連絡を取り合っており、大都市圏に暮らす同級生について以下のように語る。

「天龍村は、車で帰るのが大変。東京からだとも車で来るか、車を途中で借りようになる。地理的なのは大きいと思う。離島で暮らしているようなもの。さみしさもある。飯田で働くとしたら、通勤は厳しい。しかし、村の人間づきあいが嫌で[村を]出る人は見たことがない。」([]は著者による)

A氏は長女であるが、跡継ぎという形で「実家に帰るつもりはない。親に関する責任は感じているけれど」と言う。背景には、自身が就きたい職業が明確にあり、地域振興にかかる仕事にかかわっていきたいという思いが強いことから、就業選択を優先して居住地を選ぶ必要があること、そして既婚者であることからパートナーの事情や意向との調整が必要になるといった事情がある。村に愛着を感じ、実家に頻繁に帰省していても、Uターンを選ぶことは困難である。

卒業生アンケートでは、天龍村の将来を案じる回答が約半数を占めたが、A氏も村の将来を案じる一人であり、他の調査対象者も「アンケートには答えなかったとしても、友達同士で集まると、これからの村はどうなっていくんだろうという話をしている」と話す。A氏の周囲にはUターンを真剣に考える同世代の天龍村出身者がおり、「住んでいるのは飯田市だけど、天龍村と付かず離れずで村のことを考えている人は大勢いる。表面化しないけれども」と語る。「可能なら役場に勤めて村に帰りたいと言う同級生もいる」と言う。卒業生アンケートで捉えることのできた他出子は、天龍村外に住む他出子の一部だが、A氏やA氏の友人たちの事例は、天龍村の将来を案じる潜在的なサポーターが層として存在することを示唆するものといえる。

5.2 20代男性B氏の場合

続いて、長野県内に住む20歳代の男性であるB氏へのインタビュー調査結果を述べる。B氏は飯伊地域の高等学校を卒業後に都内の大学に進学し、学卒後すぐに長野県内で公務員(正規職員)として就職した若年Jターン者である。以下の引用は、2017年12月に実施したインタビュー調査ノートを典拠にしている。

B氏は「年間を通して、数えると2、3カ月に1回は帰省している」。具体的には、「天龍村の実家への帰省頻度は、盆と正月、5月中旬の田植えの手伝い、そして9月から10月にかけての稲刈りの手伝いに呼ばれる」。農業経験が豊富で村への愛着も強い。

現在は飯伊地域に職場があり、「今は、帰省しなくても帰省しているようなもの」。休日には、天龍村に定年Uターンした親から食事に誘われることがよくあり、天龍村に暮らす親も同じく買い物等を飯田市で日常的に行うことから、「住んでいる場所は離れていても、天龍村の生活圏は、飯田市に延びている」と言う。

現在の仕事には赴任地の異動があることから、定年退職を迎えるまでの数十年にわたって飯伊地域に定住し続けることができるとは限らない。定年を迎える前に「天龍村まで戻れるかと言えば別問題だが、下伊那には戻ることができる」という。天龍村からの通勤生活は困難だが、飯田市等の市街地に住んで市内や周辺地域に通勤することは可能との意味である。

B氏は長男であり、県外にきょうだいはいるが、「将来の家の跡継ぎをどうするかという話題は、自分の方から出して」おり、跡継ぎに関する話題を帰省時に親と話し合っている。天龍村に常住する形態で帰りたいと考えることもあるが、将来の跡継ぎに関しては、「まだ何とも」と前置きしたうえで、「実家に田畑があると[きょうだい]半分ずつというわけにはいかない。県内に異動するといっても東京に行くのと変わらないぐらい離れたところもある。いま飯伊という場にいられることは大きい」と語る([]は著者による)。異動や婚姻等によって、現在の生活が維持できるかどうかは未知数だが、天龍村に暮らす親へのサポートや実家の跡継ぎについて、早くから真剣に考えており、村や実家への愛着の強さがうかがえる。

5.3 B氏の父C氏へのインタビュー調査から

B氏の厚意により、天龍村に暮らす同氏の父親に面会してインタビュー調査を実施することができた。他出子本人と他出子の親の双方にインタビュー調査を実

施できたケースはまだ1ケースのみであるが、他出子のUターンをめぐる見解を他出子本人と親の双方の立場から明らかにすることのできる貴重な調査となった。B氏の父親にあたるC氏は60歳代で、天龍村で生まれ育った後に長らく公務員として村外で働き、定年前後に天龍村にUターンした。以下の引用は、2018年8月のインタビュー調査時のノートを典拠とする。

B氏にインタビュー調査を実施したことをふまえ、他出子のUターンについてうかがったところ、C氏は「村に働く場所がなく、若い人が出ていくのは悲しいこと」と話し、自分の「子どもは、いずれこの家に入ってくればよしとする。それだけでうれしいなと思う。そのためにも百まで生きたい。田も畑も、お金も蓄えていきたいと63歳になって思うようになった」と話す。自身や家族のために所得を得る必要のある時期には都市部で働き、定年退職後にUターンしてくれればよいという考えであり、就業機会や職種が限られる天龍村の現状をふまえた見解である。

C氏は、赴任地が天龍村から通勤可能な時期には生家から通勤していたこともあった。そして、60歳で定年退職を迎えた後にUターンし、生家に暮らしながら、親世代から引き継いだ水田を継承し、同居家族と他出子の食べる米を生産する中心的な役割を担う。機械設備も整え、トラクターなどの乗用機械もある。都市では定年退職者はリタイア層とみなされるが、農山村では、前期高齢者が農業や集落自治の担い手である¹⁾。

C氏は、定年Uターン後に農業に注力しながら、徒歩圏内にある小学校にもボランティア活動で関わる。C氏の現在の熱心な地域活動へのかかわりを支えているのは小学校の存在と言っても過言ではない。C氏は以下のように語る。

「地域のなかに小学校がないと、と思う。小学校があることに、地域の希望や明るさを感じる。[さいきん小学校を訪ねることがあって]小学校に実際に行ってみて、子どもたちは名前もわからんに。だけど、地域に子供がいなくてさみしいなと、いままでは口では言っていたけど、肌で感じた」([]は著者による)

また、自身の定年Uターンについては、独力で実現した行為ではなく、天龍村に暮らし続けてきた友人や先行してUターンした友人の存在が大きかったことも指摘している。

「あとは、帰ってくるときには、小さいころからの友達が一人でもいること。なるべくここから働きに出るようにしてきたが、どっぷり帰ってきたとき、友達がいなかったから、さみしいと感じた。村に3年居るとちがうが」

Uターンを実現するためには、気の置けない友人が先行して暮らしていること、出身村の同世代と日常的にコミュニケーションを取っていること、定年退職前に天龍村の生家から通勤可能な範囲に暮らしながら村での生活に慣れていくことが有効であることが示唆される語りである。

インタビュー調査から得た知見をもとに、若干の考察を行う。他出子が若年のうちにUターンを行うことは、Uターンにより就業機会や就業選択の幅が狭まり、所得形成が困難化するリスクがあり、賃労働者として長期にわたって安定した所得を得る必要があることを考えると、若年Uターンは困難であると言わざるを得ない。しかしながら、定年Uターンを想定すると、C氏のように貯蓄や年金で生活を維持しながら自給プラスアルファ規模の農林業を営み、地域自治で活躍する主体となる可能性がある。かれらのような定年Uターン者が継続的に現れるための方策を考えていくことは、地域の維持存続のうえで必要かつ有効な方策であろう。若年他出子も、やがては定年退職を迎える。数十年先を見据えるビジョンをもって地域の農林業や自治の担い手を考えていく必要がある。

6. まとめと今後の課題

本論文で得られた知見として、まず他出者と出身村のつながりについて整理しよう。卒業生アンケートの回答者の約7割が半年に1回以上帰省しており、約半数は一定頻度で村のウェブサイトを開覧していることがわかった。また、出身村の情報発信にも興味をもつ人が一定割合いた。SNSなどを活用して、他出者どうしがつながりを維持している姿が明らかになったこともひとつの知見である。他出子が出身村との間に一定頻度で往来関係をもっているとする、徳野貞雄などの生活構造論の研究者らが提示した仮説は、本論文での調査結果からも支持されたといつてよいだろう。

次に、他出者たちのUターンの可能性に関してまとめよう。卒業生アンケートの回答者の多くは、出身村への強い愛着をもっていた。これはインタビューでも非常にはっきりとみられた。しかし、現実のUターンの予

定や希望をもっている人は、卒業生アンケートの回答者には多くなかった。二地域居住やUターン希望者もそれほどいなかった。条件がそろえばUターン等が可能になる、と考える余地もなくはない。しかし、Uターンが難しい要因は、雇用機会や選択可能な職種、子の教育機会など、社会構造に深く規定された面がきわめて強いとみられ、簡単なものではない。ただし、インタビュー回答者の語りからは、現時点でのUターンは困難だが、定年後のUターンという選択肢はあり、定年Uターン者が地域維持の主体となりうる可能性も示唆された。

現代山村からの他出子がUターンの意向を有しているという先行研究の知見に関しては、本論文で示した調査結果からみると、疑問を呈さざるをえない。親の行く末、家の継承、出身村を思う気持ちを有し、できることならUターンしたいとの意思をもつ他出子が存在していることは、たしかに筆者らの調査でも確認された。しかし、本論文での分析結果から浮かびあがってくる他出子像とは、出身村に愛着を持ちながら村外に暮らし、条件さえそろえばUターンに踏み出す潜在的な可能性をもつものの、就業機会や子の教育機会等の条件がそろわず、自身の思いを実現することができない困難要因の中にあつて、ときに悩む姿であつた。したがって、Uターンに関心を持つ他出子が存在することをもって、村は安泰であると結論付けることは難しく、楽観的な見通しを持つことはできない。

むしろ、考えるべきは、出身地で暮らしたい、という願う人々の帰郷を阻む構造的要因を取り除き、山村からの他出子が願う生き方(その中には都市に暮らし続けたいという願いも含まれることは言うまでもない)が保障される社会を構想していくための方策である。住みたいと考える場所に住むことができる、ということはひとつの権利である。現在、この権利が侵害されており、このことに対し、山村に暮らす人々と山村を研究する研究者は異議申し立てを行うとともに、ごくあたりまえの願いのひとつとしてUターンが実現できる社会像を他出子とともに構想していく必要がある。他出子のUターンが現代山村における小規模自治体の存続にとって重要な課題であり、そこに暮らす人々、そこにUターンしたいと考える人々にとって切実な願いであることは重ねて強調したい。しかし、他出子の側の「思い」や「意欲」のみにクローズアップしてUターンの成否、条件、趨勢、可能性などを議論してしまうことは、ときに、村の存続に対して自己責任論的な理路を招来しかね

ない。

一人一人の思いや願いの前に立ちふさがり社会構造や制度を見据えていく姿勢が必要であり、我々は様々な制約要因に取り巻かれる中で選択可能な生き方を選ばされる不自由な主体ながら、様々な集合行為を通じて社会を変えていく力能も持っている。社会構造に規定されながらも、社会構造を変革していく主体として人々を捉えていく社会学の立場に立ち返ることの意義を確認して本論文を閉じたい。

注

- 1) 農業経済学における地域経済論の分野では、高齢者の役割を積極的に評価する見解が早くから打ち出されており、前期高齢者を農業生産の多様な担い手のうちの一人とみなす発想は珍しいものではない(高橋 2002)。また、島根県農業技術センターの試算によれば、中山間地域に圃場が立地する集落営農法人における畦畔管理を前提にしたデータとして、刈払機を使用した畦畔除草の対応可能年齢は76.7歳との推計がなされている(竹山ほか 2013)。

参考文献

- 船戸修一, 2019, 「大会自由報告: 「他出子」の帰郷をめぐる親世代の意識の交錯: 浜松市天竜区佐久間町を事例として」『東海社会学会年報』11: 127-129.
- 丸山真央・相川陽一・福島万紀, 2017, 『都市への他出家族が過疎農山村の高齢者の生活と農地・山林管理に果たす役割の社会学的研究』第一生命財団(助成調査研究報告書).
- 野邊政雄, 2006, 『高齢女性のパーソナル・ネットワーク』御茶の水書房.
- 大野晃, 2005, 『山村環境社会学序説: 現代山村の限界集落化と流域共同管理』農山漁村文化協会.
- 佐藤康行・内田健, 2003, 「山村における地域生活と家の変容: 新潟県安塚町の事例」『人文科学研究』111: 1-36.
- 佐藤康行・内田健, 2004, 「山村における「家」の変容と「近親ネットワーク」: 新潟県安塚町の事例」佐藤康行・清水浩昭・木佐哲朗編『変貌する東アジアの家族』早稲田大学出版部: 145-174.
- 高橋巖, 2002, 『高齢者と地域農業』家の光協会.
- 竹山孝治・山本善久ほか, 2013「集落営農型法人に

- おける畦畔除草の対応可能年齢と作業再委託方式」『島根県農業技術センター研究報告』41:19-34.
- 徳野貞雄, 2015, 「人口ダム論」と農山村集落の維持・存続: 「地方創生」論の批判的検討」『都市問題』106(7):44-54.
- 徳野貞雄・柏尾珠紀, 2014, 『T型集落点検とライフヒストリーでみえる家族・集落・女性の底力: 限界集落論を超えて (シリーズ地域の再生11)』農山漁村文化協会.
- Tolga , Ozsen, 2009, 「農山村維持・存続における他出子の可能性: 熊本都市圏在住の山都町出身他出子を事例に」『熊本大学社会文化研究』7:139-153.

上野淳子, 2016, 「他出子の訪問の社会的効果とその条件: 山村における人口流出と社会階層, 地域労働市場の関係」『桃山学院大学社会学論集』50(1):67-94.

謝辞

天龍中学校卒業生調査にあたっては、同中学校卒業生をはじめ、天龍村の皆様にご多大なご協力をいただいた。とりわけ天龍村役場には、調査対象者リストの作成や事前承諾をはじめ、調査の準備段階からご協力をいただいた。各位に厚く御礼を申し上げる。本論文は長野大学研究助成金(地域・社会貢献研究)2017年～2019年度(研究代表者:相川陽一)による研究成果の一部である。

